



古民家だより

No. 48
令和4年(2022年)10月11日(火)
越谷市教育委員会 生涯学習課

寄贈後に見田方遺跡公園に移築された旧東方村中村家住宅



第二次大戦以前に建てられた住宅＝古民家、特に茅葺き屋根の建築物は日々減少しています。これは時代の流れで仕方ないことかもしれません。市域の茅葺き家屋は昭和62年(1987年)では15棟でした。『越谷市草葺民家調査報告』日本工業大学建築史研究室

でも、古民家は現代では“過去のもの”(現代では役に立たないもの)なのでしょう。

高度経済成長によって私たちの生活は便利で快適なものになりましたが、自然の循環を利用して生きた先人の知恵や考え方はSDGsに生かせるものではないかと思われまます。

茅葺きを中心に観た

自然の循環と古民家の暮らし 民家

10月1～2日にレイクタウン周辺では「エコウィーク2022」が行われ、旧東方村中村家住宅でも展示「自然との共存 茅葺きの家」を行いました。両日で144名のご来館がありました。有難うございました。今号はそれに関連した特集です。



茅葺きの軒(下から見上げた様子)
藁、古い茅、新しい茅を交互に何層も重ねて葺かれています。

茅葺き屋根

総葺き替えは30年ごとと言われました。10年ごとくらいで、傷んだ一部の茅を差し替えました。土間の竈や板の間の囲炉裏の煙は屋根裏に行き渡って、煤などで害虫駆除や雨漏り防止になりました。・・・**不要の茅**

主要構造物・間取り・・・100年以上住めるように考えて造られています。昭和62年に調査された茅葺き家屋15棟の多くは南(南東、南西)を正面にしています。

【柱・梁】 その場所にかかる重量や見映えなどによって材や構造を考えて作られています。

【軒・庇】 建物の場所によってその深さが異なります。季節による陽光の入り方を計算して設けられています。

【土間】 主屋への出入口、台所、作業場を兼ねた部屋です。床は粘土と砂・小砂利、にがり、石灰を混ぜたものを厚い板で何度も叩いて作りました。(相撲の土俵と同じ作り方)

【壁】 柱間と上下の貫や桁の間を細い竹で格子状に施し、刻んだ藁を混ぜた泥土でそれを内外から挟み込んで塗ります。それが乾いたら上塗りを何度か重ね、最後に漆喰を塗ります。漆喰は地方によっても異なりますが、石灰、砕いた貝殻などに角又(海藻の一種)を煮だして抽出したものを糊材として加えて作りました。

屋敷林

屋敷の北西側に設けられ、冬の季節風や夏の西日から生活を守りました。・・・枯れ枝や落ち葉

屋敷林



秋の旧東方村中村家住宅(寄贈前の想像図)

茅場

手入れ・管理

土地が肥沃になりすぎると屋根葺き用としては太くて柔らか過ぎるので不適です。そのため腐葉土となる落ち葉などは取り除きます。



新芽が育つ

かつて市域の河川にも何か所もの茅場がありました。(昭和30年代夏の瓦曾根溜井。画面右側は旧平和橋)

刈り取り (晩秋～早春)



冬の渡良瀬遊水地

野焼き

良い新芽が出るように、3月後半に行います。

不要の茅

- ・刈り敷
- ・焼却→灰

(肥料)

(肥料)

田畑

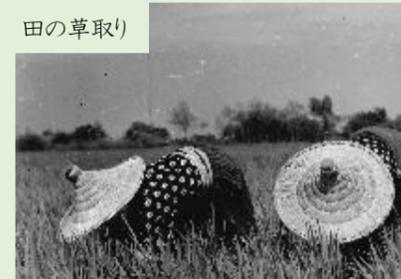
《刈り敷＝農地に肥料として敷き込むもの》

稲の使い途

- ◆米・・・食用、現金化。近世までは税でもありました。(年貢)
- ◆糠・・・漬物用、床磨き材、入浴用、家畜の飼料
- ◆もみ殻・・・クッション材、枕の中身。燃やした後の灰は消臭剤や肥料。
- ◆茎・・・俵、蓆、縄、布団の中身、履物(草履、草鞋)、家畜の飼料。

屋根葺き材

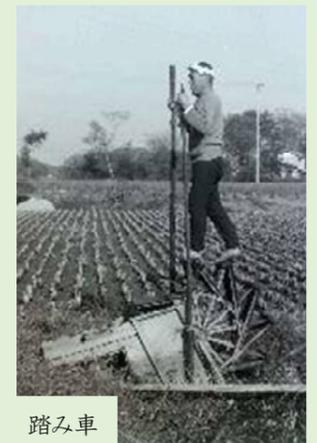
不要の茎 肥料(刈り敷、堆肥)。



田の草取り



牛耕



踏み車

写真はいずれも昭和30年代(1955～64年)頃の大間野地区の様子。

染色の材料

写真
越谷市教育委員会所蔵